

鎌倉幕府滅亡

I 研究動機と研究目的

家にあった本に最後の六波羅探題「北条仲時」が出てきました。戦に破れ、自害する際、彼と共に432人ものが一緒に死んだという話を聞き、衝撃を受けたのでなぜ鎌倉幕府が滅びたのか調べていくうちに、もっと詳しく知りたいと思い、このテーマを選びました。

II 研究方法

- ・鎌倉時代末期について書かれている本を読む。
- ・実際に史跡に行く。
- ・地元の人にお話を聞く。

III 研究内容

はじめに

鎌倉幕府はなぜ滅亡したのか。141年も続いた初めての武家政権は、調べてみたらたった43日で滅んでいた。その理由について『太平記』にはこう書かれている。

〈蒙窃かに古今の変化を採って安危の所由を察るに、覆つて外無きは天の徳なり。明君これに体して国家を保つ。載せて棄つること無きは、地の道なり。良臣これに則つて、社稷を守る。もしその徳欠くる則は、位良りといへども、持たず。いはゆる夏の桀は南巢に走り、殷の紂は牧野に敗す。その道違ふ則は、威有りといへども、保たず。〉

つまり無私なる徳にのっとって政治をするのが君臣の孝の道で、その道を外れた者は国家や地位を保つことが出来ないという中国の思想に影響を受けているが、これは南北朝の動乱を招いた北条高時はもとより後醍醐天皇のことも指していると思われる。どちらも天の道に背いたから国を治めることが出来ずに滅んでいったのである。

ではなぜ後醍醐天皇は武家社会を公家社会に戻したかったのか。鎌倉時代の何が悪くて鎌倉幕府は滅亡しなくてはいけなかったのか。考えてみることにした。

後醍醐天皇

後嵯峨天皇が自分の死後、後深草・亀山のどちらを天皇にするか決めず幕府に任せたことから、幕府が天皇の決定権を持ち、後深草系の持明院統と亀山系の大覚寺統が激しく争うこととなった。後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒そうとした最大の原因は、皇位に対する幕府の干渉を不満としたからであった。

文保2（1318）年、花園天皇の譲位を受けて31歳で即位。もともと後宇多天皇の後継者は、後醍醐の兄・後二条天皇だったのだが早くに亡くなったので、跡を嗣ぐべき後二条皇子邦良親王への中継ぎ役として後醍醐が推されたのだ。このため後醍醐天皇が自分の子孫に皇位を継がせることは否定されており、後醍醐天皇は不満を募らせた。それ

が後宇多法皇の皇位継承を承認し保障している鎌倉幕府への反感につながってゆく。

おりしも元亨元（1321）年の大干魃が起り、草木は枯死し土は焼けた。餓死した者は野に満ち、飢えた者は倒れ、あたかも地獄絵図を見るようだった。〈花園天皇宸記〉また悪党と呼ばれた武士たちが勢力を伸ばして暴れまわり、南都（奈良興福寺）・北嶺（比叡山延暦寺）の衆徒や蝦夷の反抗など、幕府はその鎮圧に追われて土台を揺り動かしていく。〈鎌倉年代記〉

後醍醐天皇はこの飢饉や騒乱を聞き、「もし私に不徳があれば、天は私ひとり罰すべきである。庶民にはなんの罪があつてかような災難にあわねばならないのか」〈太平記〉と帝みずから徳が天意にはずれたことを嘆いた。

北条氏の衰退が際立ってきた頃、後醍醐天皇は朝廷の手で天下を治めるため、執権政治に不満を持つ近習の人々や武士たちを集めて、何度も討幕計画を立てていく。

・正中の変

正中元（1324）年、後醍醐天皇の鎌倉幕府打倒計画が事前に発覚して、六波羅探題が天皇側近らを処分する正中の変が起こる。正中二（1325）年、日野資朝・俊基が捕らえられ鎌倉に連行。死罪を免ぜられ資朝は佐渡に流され、俊基は京都に送還。しかし幕府は後醍醐天皇には何の処分もしなかった。天皇はその後も密かに倒幕を志し、醍醐寺の文観や法勝寺の円観などの僧を近習に近づけ、興福寺や延暦寺など南都・叡山の寺社に赴いて寺社勢力と接近する。大覚寺統に仕える貴族たちはもともと邦良親王を支持する者が大多数であり、持明院統や幕府も基本的に彼らを支持したため、後醍醐天皇は次第に窮地に陥ってゆく。そして邦良親王が病で死去したあと、持明院統の嫡子量仁親王が幕府の指名で皇太子に立てられ、後醍醐天皇退位の圧力はいっそう強まった。

・元弘の変

元徳三（1331）年4月29日、後醍醐天皇の2度目の倒幕計画が側近吉田定房の密告により発覚した。謀反を企てた法勝寺の円観・醍醐寺の文観・忠円を捕え、後醍醐天皇の近臣、日野資朝は佐渡にて処刑。円観・文観・忠円らは鎌倉へ護送。日野俊基が六波羅に捕えられ、鎌倉葛ガ原(化粧坂の山上)にて処刑された。

元弘元（1331）年8月24日、身辺に危険が迫ったため後醍醐天皇は急遽密かに京都脱出を決断、笠置山に籠城する。

鎌倉幕府はこの時足利高氏に派兵を命じ、高氏は天皇の拠る笠置と楠木正成の拠る下赤坂城の攻撃に参加する。このとき、父貞氏の喪中であることを理由に出兵動員を辞退したが許されなかった。『太平記』は、このことから高氏が幕府に反感を持つようになったとする。9月28日、後醍醐天皇の立て籠もる笠置山が奇襲により陥落。後醍醐天皇は山城の多賀郡、有王山（京都府綴喜郡出手町）にて捕えられる。

北条氏は後醍醐天皇に三種の神器の授讓を強要し、神璽、宝剣は光厳天皇へ渡った。

その後鎌倉勢は赤坂城を攻め落城。楠木正成は金剛山に逃れる。

元弘の乱は結局失敗に終わり、後醍醐天皇は廃位され、謀反人として隠岐へ配流される。代わって持明院統の皇太子量仁親王（光厳天皇）が即位した。

しかしその後も、後醍醐天皇の皇子大塔宮護良親王や河内の楠木正成、播磨の赤松則村（円心）ら反幕勢力（悪党）が各地で活動していた。この時勢を踏まえ、後醍醐天皇は名和長年を頼って隠岐を脱出し伯耆国の船上山で挙兵する。

足利高氏

『難太平記』には、祖父・家時が自分の寿命を縮めることと引き替えに、子孫3代のうちに足利家が天下を取ることを祈願して自刃したと伝えている。

鎌倉幕府の有力御家人足利貞氏の次男として生まれ、北条氏一族の有力者であった赤橋流北条氏の赤橋（北条）守時の妹赤橋登子を正室に迎えている。その後、義兄の守時は鎌倉幕府の最後の執権となる。

元弘の乱の派兵の際、父の喪中であることを理由に出兵を辞退したが許されなかったことから、高氏が幕府に反感を持つようになったとされている。

元弘3（1333）年、後醍醐天皇が隠岐を脱出して伯耆国船上山に籠城、高氏は再び幕命を受け西国の討幕勢力を鎮圧するために上洛した。このとき、高氏は妻登子・嫡男千寿王（のちの義詮）を同行しようとしたが、幕府は人質としてふたりを鎌倉に残留させている。しかし、反乱軍を追討するため幕府から派遣された高氏は、後醍醐天皇の誘いを受け天皇方につくことを決意、4月29日丹波国篠村八幡宮で反幕府の兵を挙げ六波羅探題を攻略することになる。

北条仲時～六波羅探題滅亡～

鎌倉幕府最後の六波羅探題北方である。

普恩寺流で第13代執権である北条基時の子。

篠村に布陣していた足利高氏が京をめざして出立し攻撃、京を占拠。

幕府方は六波羅に集まるが敗色が濃くなった為、光厳天皇・後伏見・花園上皇を伴い、北方の北条仲時、南方の北条益時と共に、一旦六波羅を捨て鎌倉に逃れ再起する道を選ぶ。その数二千以上。六波羅陥落。

5月8日、六波羅陥落の知らせは近畿一帯に伝わり、東山道（中山道）には野伏が一行を待ち構えており、篠原（滋賀県野州郡）にたどり着いた時には既に700名ほどまでに減っていた。先陣を務めていた南方の時益は敵の放った矢に射抜かれて討死。同行していた光厳天皇も流れ矢が当たって左足を負傷した。何とかその場を切りぬけ、先陣を家臣の糟谷宗秋に、後陣を佐々木時信に三手に分けたが、彼らが行きついた番馬（滋賀県米原市）の宿は後醍醐天皇の五宮（守良親王）が放った令旨に応答した近在の野伏たち約五千人によりすでに封鎖されていた。先陣の宗秋は仲時らと共に、近くの辻堂（蓮華寺）に身を隠して後方からの援軍到着を待つ事にしたが、実はこの時仲時討死の誤報が流れた為、「もはや決着がついた」と判断した時信は高氏側に降伏を申し出た後、京都に戻ってしまっていた。北条仲時は最後の時を悟り、その場で腹掻き切って切腹。享年28歳。

「都合四百三十二人、同時ニ腹ヲゾ切タリケル。血ハ其身ヲ浸シテ恰黄河ノ流ノ如ク也。死骸ハ庭ニ充満シテ、屠所ノ肉ニ異ナラズ。」〈太平記・巻九〉

それを見た宗秋は「殿を見捨てるなどできません。死出の山道、お供します。」と言って、仲時の体を貫いた刀で以って自害。

その場にいた432名が二人の後を追って自刃。

辻堂の庭は血の海と化し、死体の山で埋め尽くされた。



北条仲時像（蓮華寺）



東福寺六波羅門
（六波羅探題の南門）



当時の矢傷



蓮華寺過去帳

光厳天皇は野伏集団に捕えられ、五宮は持っていた三種の神器を接収。

近江国蓮華寺の方の話では、北条仲時公以下430余名のお墓は寺の境内に散在していたが、江戸時代、井伊の殿様が馬で蓮華寺を訪ねた時のこと。その夜、仲時公が夢に現れ「馬で見下ろすとは、何事」といわれ、北条仲時公のお墓は向かいの山の頂上に移転したそうである。

お墓もこのように集めて、整然とお祭りしたそうだ。



北条仲時らの墓

新田義貞

新田氏（上野源氏）は足利氏と同族で、源義家の四男・義国の長子義重から始まる。だが、義貞が家督を継承した頃の新田宗家の地位は低かった。

「上野国住人新田小太郎義貞と申すは、八幡太郎義家十七代の後胤、源氏嫡流の名家なり。しかれども平氏世を執りて四海皆其の威に服する時節なれば、力なく関東の催促に随て、金剛山の搦手（元弘三（一三三三）年正月河内金剛山の楠木正成攻撃のこと）にぞ向かはれる。」

元弘の乱で、義貞は鎌倉幕府に従って楠木正成討伐に向かい千早城の戦いに参加したが、病気を理由に無断で新田荘に帰ってしまう。『太平記』には元弘の乱で出兵中、義貞が護良親王と接触して北条氏打倒の綸旨を受け取っていたという経緯を示している。

上野国に戻った義貞が一族を集めて討幕の行動を起こそうとしていた時、北条高時は京都攻撃の軍勢を動員しようと近辺の荘園から兵糧を集めようとした。幕府の派遣の徴税使が義貞のもとにも現れたがこれを誅殺したため所領を没収された。（〈太平記〉・上野国〈長楽寺文書〉）そして義貞の計画が発覚、高時は即座に義貞追討を命令した。

5月8日、新田義貞は庄内（上野国）の生品明神（群馬県新田郡）で150騎程で倒幕の行動を開始。翌日、他の一族を加えつつ武蔵国に攻め入った。また5月2日に鎌倉からの脱出に成功していた足利高氏二男千寿王（義詮）も200騎余引きつれて合流。これを迎え撃つため北条貞国・長崎高重が武蔵国に派遣された。

5月11日武蔵国小手指原で、その後入間川・久米川や分倍河原（東京都府中市）で大きな合戦があるが進軍を阻止できず、5月16日新田勢が鎌倉勢を破る。

鎌倉攻め

鎌倉は「南の方は海にて、三方は山なり。」天然の要害となる尾根が南面の海を除く三方を囲み、出入り口とされる切り通し七つ口を突破しなければならない。



極楽寺口



巨福呂坂口



化粧坂口

かつて鎌倉の守りだった
切通しは今は寂れて通行止め
になっている所も多い。

新田義貞は、膨れ上がった軍勢を藤沢の遊行寺で、軍勢を三方に分けた。

第一軍は大館宗氏が主将、江田行義を副将として西の七里ヶ浜に面する海側の極楽寺口を、第二軍は堀口貞満を上將軍、大嶋讃岐守守之を副將軍として東の巨福呂坂口（山側）を、第三軍は新田義貞を上將軍として、弟にあたる脇屋義助が副將軍の主力が化粧坂口に進撃。一方の幕府側も鎌倉を囲む峰を要害として山内に立て籠もり、各切り通し

には、守りを固める軍勢を部署した。幕府軍の総大将は北条高成、時守、安達達景である。

「上つ道」極楽寺坂（海側）へは、大仏貞直を大将とした三千騎を、

「中つ道」化粧坂へは金沢越後左近大夫将監忠時を大将とした三千騎を、

洲崎・巨福呂坂（山側）へは執権赤橋（北条）守時の五千騎を。

「下つ道」朝比奈切り通しへはこの方面を館に構える金沢貞将を配し、これとは別に五千騎の予備兵力も準備。これらを併せて幕府軍の総勢は一万六千程度。あれほどの強勢を誇っていた幕府軍も、今や新田軍を下回る兵力となっていた。

「同（元弘三年五月）十八日より廿二日に至るまで山内小（巨）袋坂・極楽寺の切通以下、鎌倉中の口々、合戦の時声、矢呼び、人馬の足音、暫くも止む時なし。」〈梅松論〉
5月18日、鎌倉の攻撃を開始。

5月19日、極楽寺切通（海側）を、新田軍の武将の大館宗氏・江田行義が破る。

「下つ道」朝比奈切り通しを攻め上がってきた千葉貞胤率いる軍勢に鶴見で遭遇した金沢貞将が敗れる。夜、洲崎（山側）の幕府側の総大将北条守時が、自らの軍勢が散り散りに追い散らされる中一步も退かず、ここで自害。新田軍が山内周辺まで押し寄せた。

5月20日、新田義貞は極楽寺口および稲村ヶ崎方面に進出。相模湾沿いの稲村ヶ崎を通過して鎌倉の前浜に突入、稲瀬川の東西の民家を焼き払った。しかし幕府方が決死の防戦に務めたため、新田軍の総大将大館宗氏が討ち取られる。（宗氏は稲村ヶ崎の十一人塚に葬られている。）民家を焼き払った炎の為、館近くに火の手が上がったので、高時は千余騎で葛西ガ谷に引き籠もり、諸大将の軍勢は東勝寺に集まった。これはこの場で兵たちに敵を防がせ、心静かに自害するためであった。その様子は本当に厳かに見えた。だからここまで高時に付き従った者たちはひたむきに死を求めていたのである。

「相模入道千余騎にて葛西谷に引き籠り給ひければ、諸大将の兵どもは東勝寺に充満たり。これはここにて兵どもに防ぎ矢射させて、心静かに自害せんためなり。誠にゆゆしくぞ見えし。さればこれまで付き随ふ物は、死を一途にぞしける。」〈太平記・巻十〉

5月21日、義貞は最後の決戦を挑み、化粧坂を副将に任せ稲村ヶ崎まで詰め寄せた。

『太平記』では新田義貞が稲村ヶ崎の波打ち際の岩場まで来ると馬を下り、かぶとを脱いで海神に祈りをささげ、持っていた黄金の太刀を海中へ投げ入れると見る間に潮が引き、磯伝いの侵入路が俄かに現われ新田勢は由比ガ浜へ進入、鎌倉へ進攻できたとされる。



稲村ヶ崎

干潟になった時期を見計らって稲村ヶ崎の干潟を通過して新田軍が鎌倉府内へ再び突入していった。幕府軍もこれに気づき、破られた極楽寺坂へは護りを固める為に極楽寺大門に拠って懸命の防戦をする。極楽寺坂攻めに取り付いた新田軍は苦戦を強いられたが背後を突いた山越えの部隊は、極楽寺坂の幕府軍を追落とした。極楽寺口の防衛戦も破れ、守護していた北条貞直は前浜まで退いたものの、義貞の弟義助軍と戦い郎従とともに討死した。

5月22日、巨福呂坂口の防衛戦も破れて新田軍が突入。金沢貞将も討死した。

化粧坂口の防衛戦も破れ、鎌倉のあちこちで合戦の火の手があがった。

北条高時

正和5（1316）年14歳で14代執権となるが、内管領長崎高資らが対抗する者たちを誅殺して（霜月騒動や平禅門の乱）権勢を強めることによって、高時は自分の思う政治

を行えなくなり、次第に鬪犬や田楽あそびにうつつを抜かすようになっていた。そのため、幕政に失望する御家人も多くなっていた。『太平記』や『増鏡』『保暦間記』『鎌倉九代記』など後世に成立した記録では、鬪犬や田楽に興じた暴君または暗君として書かれる傾向にあったが高時の実像を伝える当時の史料は少なく、足利尊氏を正当化し美化するための誇張も含まれていると思われる。実際はどのような人物だったのかというと、『保暦間記』は「頗る亡氣」と記し、金沢貞顕が残した『金沢文庫古文書』にも彼が病弱だったことが強調されている。

高時は数百名もの一族郎等と残った手勢を連れて滑川を渡り葛西ヶ谷の東勝寺に入ると、寺に火を掛け、崖下のやぐらにて自害。享年31歳。

『太平記』によれば寺に籠った北条一族と家臣は、長崎高重、摂津道準から順にそれぞれ切腹、最後に高時、舅の安達時顕と自害したという（他に第13代執権の普恩寺基時、内管領の長崎高資、第15代執権の金沢貞顕など）。『太平記』には、自害した人々は283人の北条一族と家臣の870人とあるが、文学的誇張もあると推察される。多くの付き従った家臣達もその場で亡くなったとされるが、叶わぬもの達は名越きり通しを越えて逃げ、各地に潜伏して再起を期したとも伝わる。新田軍の放った火は鎌倉の街を焼き尽くした。鎌倉の彼方此方では、近年まで小石ほどの人骨が多く出ていたそうである。

「六十余州、悉く、符を合たる如く、同時に軍起りて、纔に四十三日の中に皆滅びぬる業報の程こそ不思議なれ」〈太平記〉



東勝寺・
腹切りやぐら

IV まとめ

- ・鎌倉幕府は、政治の実権を天皇に戻したかった人（後醍醐天皇）や、源氏の誇りがある人（足利尊氏）、幕府の使者を殺してしまい、討幕に加担せざるおえなくなってしまう人（新田義貞）たちによって倒された。
- ・北条仲時と一緒に死んだ人々は、主君への恩や正義、武士としてのプライドなどを守るために、生き残るよりもみんな誇り高く死を選んだ。

V 感想

鎌倉時代末期を細かく調べてみると、たくさんの人が誇り高く死んでいったことが分かった。そして、その人たちが死んでいった様子を調べてみると、自分の部下を守るためや、一族のプライドを守るために死んでいった人などそれぞれドラマがあった。私は、自分の命よりもプライドを守ることにとても感動した。

VI 参考文献

「北条得宗家の興亡」 岡田清一 新人物往来社 2001年4月25日

「物語日本の歴史12 後醍醐天皇と足利尊氏」 笠原一男 木耳社 1991年11月10日

「太平記①〈全四冊〉」 長谷川瑞 小学館 1994年10月20日

「太平記の時代」 新田一郎 講談社 2001年9月10日

「太平記」 佐藤亮一 新潮社 1990年10月10日

「日本の古典11 太平記」 梶原正昭 集英社 昭和55年8月9日